

# 五小の風景

No. 4

五日市小学校長 國政 直文

## ちょっといい話

人は、感動することで、「やる気」「勇気」、「おもいやり」、「創造力」、「道徳的価値観」などを育むことができます。また、その感動の多さでそういった気持ちや価値観が高まっていきます。子どもたちには、「感動する心」を持ってたくさんの感動を体験してほしいと思います。そこで、今月の朝会では、子どもたちに「感動する心を持とう」という話をしました。「感動」という言葉をキーワードに、何かいい話はないかなと調べていたところ、なるほどと思う話がありましたので紹介します。

この話は、岡山県のあるお寺の住職 長田暁一氏が書かれたものです。

～ 町内の運動会も終わりました。そこでの美しいエピソードです。

ネコ競争、それは親と子どもの二人が組んでやる競技です。

まず、お父さんが頭に袋をかぶって四つんばいになって、きめられたコーナーを回って来て次の子どもにタッチするんです。だから、地面から手を放したり、二本足で走るのはルール違反なのです。

でもなんとかして勝ちたいという、勝負にこだわる人が多いものですから、タッチラインが近くなるとたいいていの者は二本足に立ち上がってしまいます。

ところが、一夫君のお父さんは終始四つんばいで走り、タッチの場所でラインはどこだどこだと手探りで探しました。そして、お父さんのふしくれた指の五本の線を、くっきりと白いラインに残してバトンタッチしたんです。

一夫君は、はっきりと見ていました。

「うちのお父さんは正直だ。他の親たちはあと3メートルというあたりから立ち上がって走っている。僕のお父さんは、最後まで正直にしたためにビリになってしまった。ビリになっても僕は、お父さんを尊敬する。

僕はお父さんがつけた五本の指のあとを忘れない。」

これは、一夫君の作文から拾った話です。

一夫君のお父さんは、子どもに何かを教えるやろうとか、感動させようとか、意識したんではありません。でも、親の生き方、考え方が、ストレートにふきだした行為が、知らず知らずに影響を与えているわけです。

親の平素の行為が、子どもに感動を与えるというのも、結局は親の人間性ではないでしょうか。

野良仕事、水仕事で両手が真っ赤にひび割れているお母さんに「お母さんの手、ほんとうにひびだらけだなあ」と一夫君が言います。

お母さんは、はにかみ笑いをしながら、「うん、スーパーでお金を払うて、おつりをもらうのが恥ずかしいよ」

僕はお母さんの言葉にジーンとききました。と一夫君は作文に書いていました。

子育てのうまい親とは、小さな感動を与える親なんだなあ、思うことしきりです。～

なかなか深い話だなと思います。私自身、この話を読んで、これまでの自分自身の子育てを振り返ったとき、反省ばかりです。はたして、自分が子どもに要求していたことを自分自身そのように行動していただけるか。自分自身の行動はさておいて、子どもにだけ理想の姿を求めてはいなかっただろうか。はなはだ疑問です。

「子は親の鏡」と言われますが、子育てをすることで、親自身も成長していくんだと思います。

この話にもあるように、子どもたちに小さな感動を与えることができるよう、時には自分自身の生き方、考え方について深く考えてみるのもいいかも知れませんね。

来週から、いよいよ長い夏休みに入ります。子どもたちには、事故にあうことなく、また、健康を害することなく無事夏休みを過ごしてほしいです。8月27日には、子どもたちの元気な姿に会えることを楽しみにしています。



